

3. 調査区

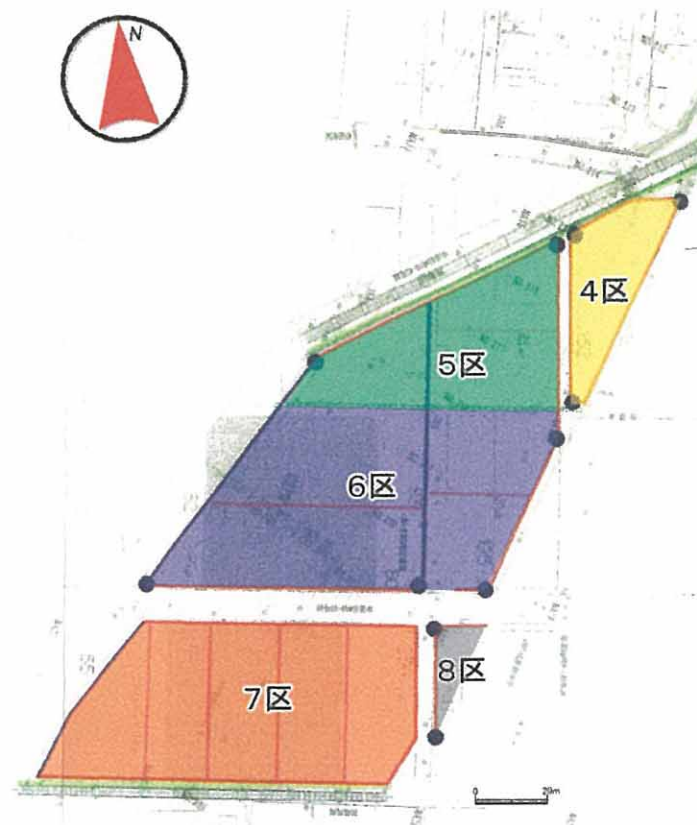
調査区は、現在の道路や水路を境として、右の図のように4～8区の5つに区切っています。今年度は、7区から調査を開始して、現在は5・6区を調査中です。

4. 検出された遺構

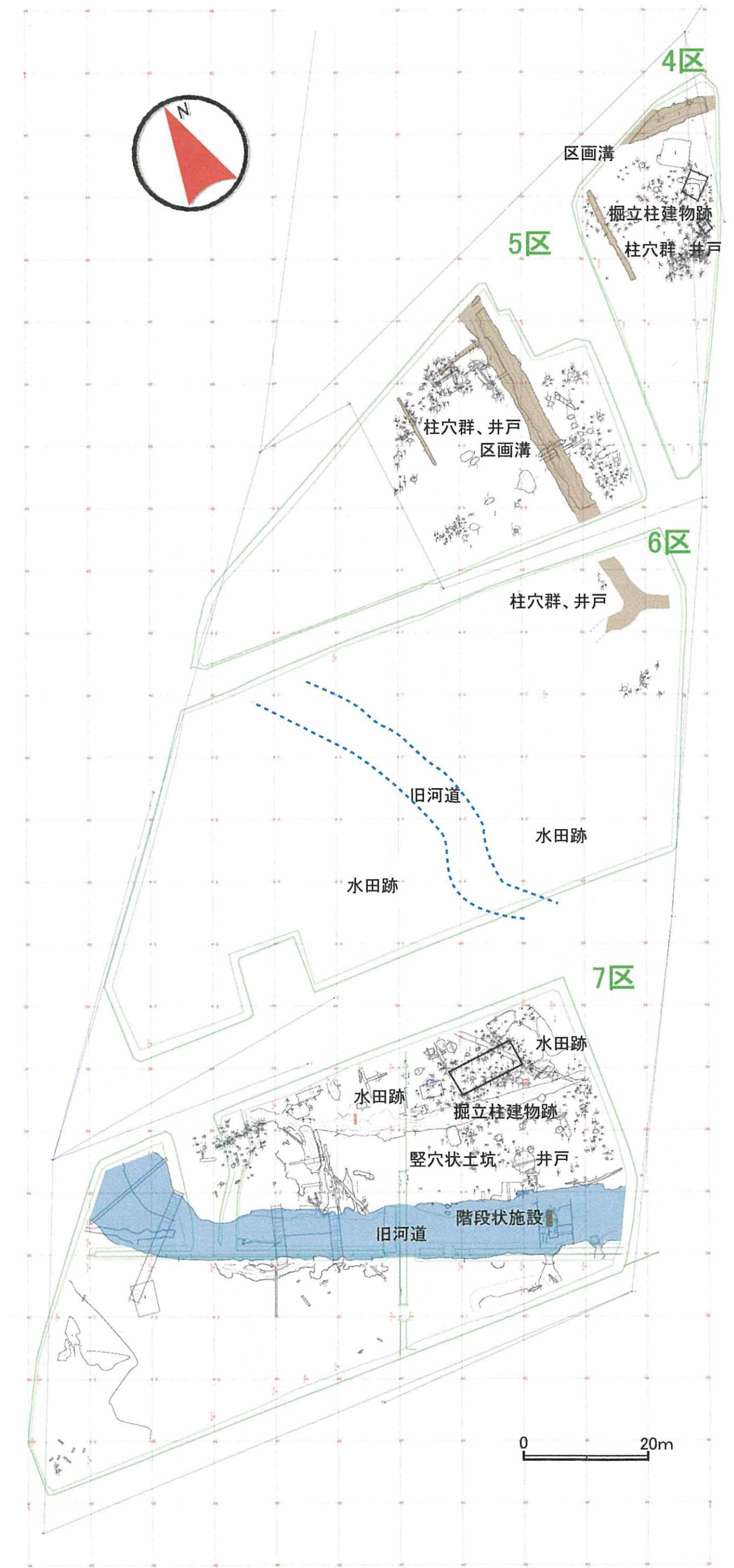
遺跡は、地形が北と西に向かって緩やかに傾斜していて、6区と7区で調査区を斜めに横切る旧河道が2条見つかっています。6・7区ともに、旧河道から西へ行くに従い遺構が少なくなり、標高が高い東側に掘立柱建物跡や井戸などの住まいに関する遺構が、標高の低い西側では水田跡が見つかっています。おおむね旧河道を目安に居住地と耕作地を分けて土地を利用していた可能性があります。

おもな遺構は、掘立柱建物、井戸、土坑、居住地を区画する溝、旧河道への上り下りに利用した階段状施設、水田跡などがあります。ほとんどの遺構は、出土遺物から鎌倉時代～室町時代(13～15世紀)に構築されたと考えています。昨年度の調査でも、この時代の遺構が多かったので、当時の集落の範囲がかなり広がったことが想定できます。また、昨年度の調査区(1～3区)は13～14世紀の遺構が、今年度の調査区では15世紀の遺構が多く検出されたことから、時期によって居住地を変えていたような様子も見られます。

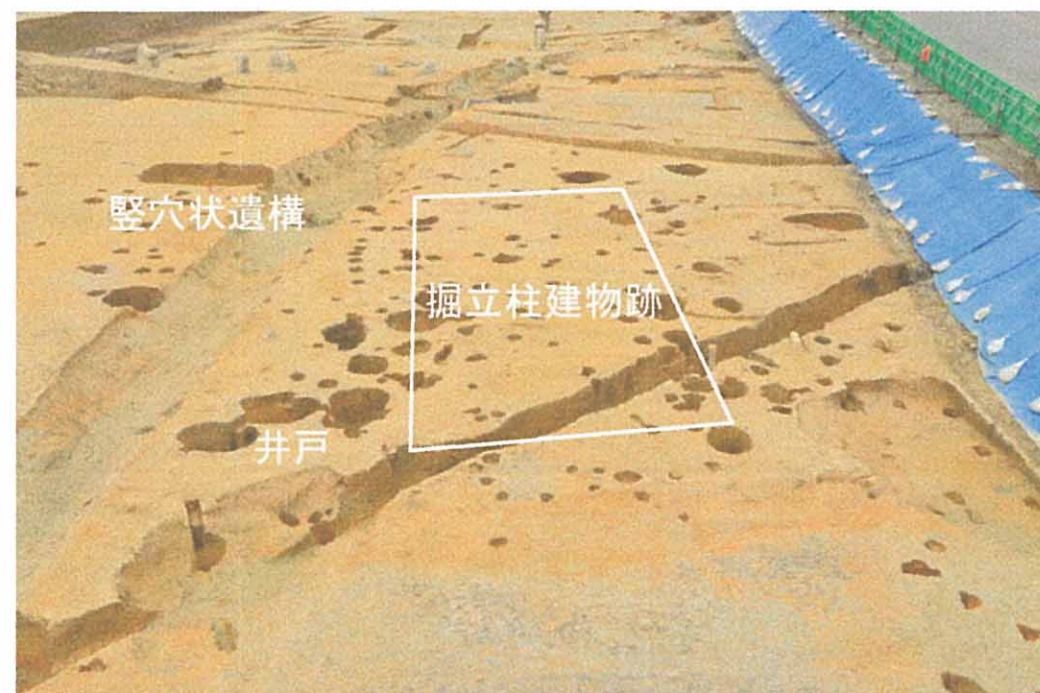
水田跡は、中世と近世の水田区画が見つかっています。6区では、畦畔跡などの区画が多く見つかっており、江戸時代(17世紀以降)の遺物が出土していることから、近世の水田が広がっていたようです。



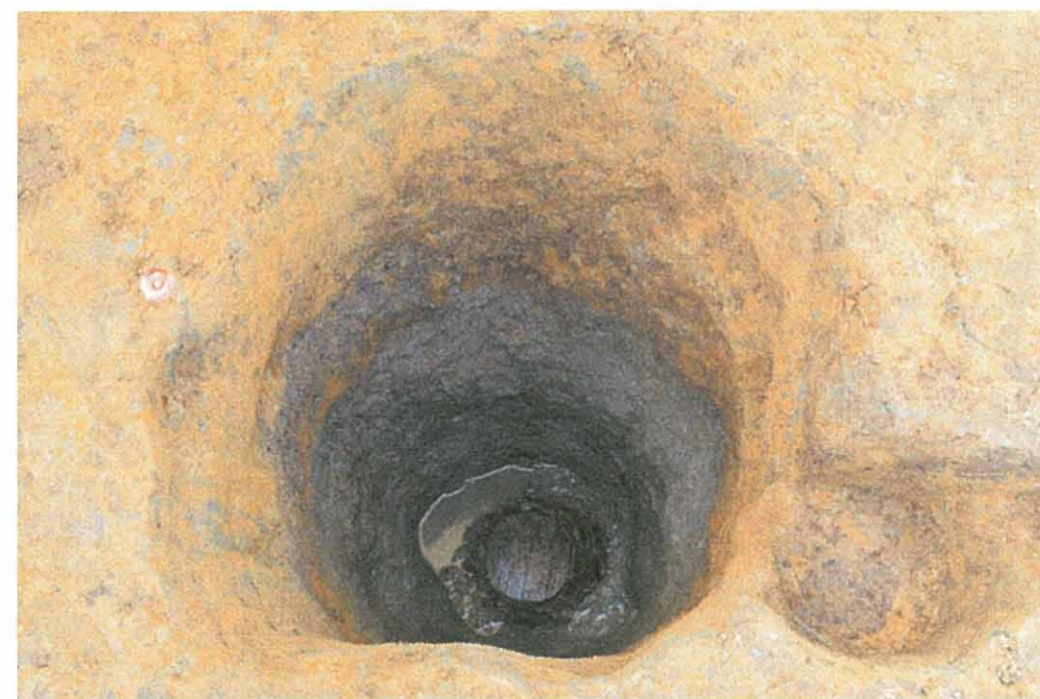
調査区の呼称



丘江遺跡全体図



7区の掘立柱建物跡 掘立柱建物は、礎石を置かずに地面に掘った穴に柱を据えて屋根をかけた建物で、一般に掘立小屋と呼ばれる簡易な建物です。写真の掘立柱建物は、梁間1間(4.4m)、桁行2間(10.3m)の大きな建物になりそうです。



4区の井戸 井戸はすべて素掘りで、板や石で組んだ井戸側と呼ばれる井戸の崩落を防ぐための施設は持っていません。直径1.2m程度で、深さが1.5m以上のもの多く見つかりました。写真のように、底から曲げ物が出土した井戸もあります。



6区の区画溝 4～6区で、幅約2m、深さ約1mの大きな溝が見つかりました。断面の形と土の堆積状況から、同時期に掘削されたと考えられ、区画整理のように、居住地を幾つかに区切るために掘られた溝と推定しています。



区画溝の土層堆積状況 区画溝の土層堆積状況になります。最初に掘削した溝が埋まってしまったにもかかわらず、再び掘り返して区画を維持しようとした様子が伺えます。区画内で居住する場所が決められていたためでしょうか。